

内発的発展論再考

市原 あかね

(金沢大学)

地域の発展を論ずる視点として、外来型開発に対抗する内発的発展の論理は一定の指針を与えてきたといえよう。地域社会が自治的主体的力量をはぐくみながらそれぞれの可能性を開花させていくという視点は、戦後の国家主導型コンビナート開発等を批判しオルタナティブを提示するものであった。この視点は、開発の経済的パターンを決定する巨大企業に対する批判のみならず官僚国家批判をふくんでおり、国家でも市場・企業でもなく地域社会が主体となる可能性をさぐろうとするものである。それゆえ、コモンズ論やコミュニタリアニズム、地域発展の基盤としての社会関係資本、社会的排除・社会的包摂における地域社会への注目、ギデنزの第三の道に共鳴する議論と評することができよう。

しかし、現代資本主義のグローバリゼーションと関連づけて内発的発展論とこれと共鳴関係を持つ地域社会への関心をとらえなおすとき、都市間競争、地域間競争の文脈に足をすくわれているような違和感を感じざるをえない。

地域社会の存続をかけた戦いは一体どこで戦えばいいのか。地域というスケールでたかえば十分なのだろうか。グローバル経済のもとで国家が競争国家としてあらわれ、職を持たない人々への教育が強調され、それぞれの努力で国際社会の中に地位を獲得した競争都市がモデルとされる時、内発的発展論はそれ自身で有効な対抗軸足りうるのだろうか。都市間や地域間のネットワークや協力を追求することに運動論的な意義があることを踏まえた上で、都市間関係、地域間関係に協調をもたらす国際的な枠組みや国民国家の制度的条件をその運動の目標として据える必要はないのか、そうした条件を明らかにする必要はないのか。つまるところ、地域にとってのたたかいの場は地域をこえたスケールにも存在しているのではないか。

本報告は、現代地域の諸問題を明らかにする上でグローバリゼーションが不可欠なメカニズムであり、内発的発展論的な地域社会の主体化にかかわる議論はそれを広く可能とする条件の明確化によって補われなければならないという立場から以下の点を論ずる。第1に、内発的発展論とこれと共鳴関係にあると思われる社会重視の議論の広がり整理する。第2に、この種の議論が現代資本主義批判としてどのような有効性と限界をもつか、特に限界については新自由主義との親和性を中心に、論じる。第3に、現代資本主義をグローバルな時空構造の編成として世界システムのとらえ、そのなかで地域がおかれた条件を明確化する作業と、国家、国際体制にかかわる枠組みを論じることの重要性を整理し、地域社会自律のための国際連帯の意義について論じる。特に、以上の議論を展開するに際して、環境問題・共進化の視点を導入することを試みたい。